

南足柄市立向田小学校

研究テーマ：「生きる力」を育む授業づくり
～よりよい道を探究できる子の育成をめざして～

1 実践の目的

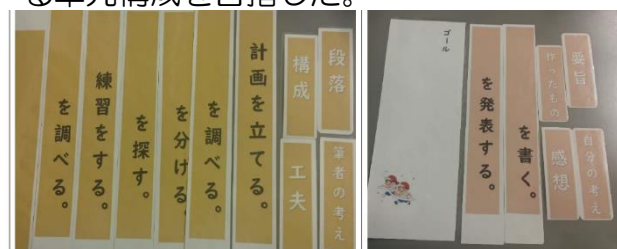
現行の学習指導要領において、子どもたちが時代の変化を前向きに受け止め、人生をより豊かにするために主体的に考え出す「生きる力」の育成は、極めて重要な課題である。本校では、子どもたちが自ら課題を発見し、解決の見通しをもって他者と協働しながら解決へと向かう資質・能力を養うため、国語科（説明的な文章）を中心とした研究に取り組むこととした。具体的には、「課題を発見する力」「解決の見通しをもつ力」「考えを伝える力」「考えを調整する力」「解決する力」の5つの力を重点的に育成し、日常生活や他教科の学習で実際に活用できる学力の獲得を目指した。

2 実践の内容

(1) 単元構成の工夫

教職員が明確な指導観・教材観をもち、ねらいを達成するための適切な学習活動を系統的に組み立てられるよう、「単元構成チェックシート」を作成し、活用した。このシートを用いることで、教材の特徴や身に付けさせるべき国語的な見方・考え方を整理し、導入の工夫や授業時間外での活用（宿題での説明学習等）を適切に配置することが可能となった。また、学びの目的を明確にするため、単元を通して習得させたい内容を教材と関連させて端的に示したものを「テーマ」、テーマをもとに児童とともに作る単元を貫く課題を「学習課題」、課題解決のために、本時で何を達成するかを定めたものを「めあて」とし、

3つの言葉の差異化を図った。さらに、児童自身が学習計画を立てる力を養うため、「学びブロック」と「活用ブロック」を導入した。これらを組み合わせることで、中学年以上では児童自らが解決への見通しを立て、自律的に学習を進めることができる単元構成を目指した。



学びブロックの例

活用ブロックの例



学びブロック・活用ブロックを活用した板書

(2) 研究協議について

研究協議においては、教職員自らが授業展開のよさを体験的に理解し、具体的な改善策を検討できるよう、実際の授業と同様の「導入・展開・終末」の流れで実施した。まず協議のねらいを確認した後、一人ひとりが自身の考えをデジタル付箋に記入して投稿するステップを設けている。これらの意見を協議の柱にそって話し合い、グループ内での探究を通して解決に向けた収束を図るプロセスを重視している。また、協議の活性化と可視化を図るため、昨年度までは Jamboard を活用し、今年度からは Figjam を導入した。このデジタル付箋

を導入したことで、全教職員の意見を俯瞰でき、議論を深める手立てとなった。

協議の進め方として、グループ内では司会や記録を毎回持ち回りで担当し、多様な役割を経験できるよう配慮した。最終的にはグループごとの報告と講師や指導主事による指導・助言を経て、個々が振り返りを行うことで、学びや今後の課題を校内全体で共有する体制を整えた。



Figiam を活用した研究協議

3 実践の成果と課題

(1) 指導方法の確立

2年間の実践を通じ、本校における授業づくりの手順が確立された。特に「単元構成チェックシート」の活用により、学習指導要領と照らし合わせた焦点化された単元構成が可能となった。また、子どもと単元計画や学習課題を考えるための多様な手法が共有されたことで、全教職員が授業づくりに見通しをもち、手応えを感じながら指導に取り組めるようになった。

(2) 児童の「生きる力」の育成

学習課題に向けて既習事項を活用しながら解決していく学習スタイルが定着した。自分たちでゴールを設定し、計画を立てる活動が習慣化され、高学年ではブロックを使わずに自ら単元計画を作成する姿も見られた。また、獲得した知識が「駆動」し、4年生が図工の構図に「アップとルー

ズ」の視点を生かしたり、5年生が他教科での意見の相違を言葉の解釈の違いから解決しようとしたりするなど、生活に生かす態度が育まれた。校内研究会で授業提案をしたクラスで行ったアンケートでは「国語の勉強が分かる」と答えた児童が97%に達し、本研究の方向性をもとに授業を組み立ててきたことで、児童の国語科の学習への意欲の高まりが確認された。

3 国語科としての学びの定着

児童の国語科の学習への高まりが見られた一方で、みなみステップアップテスト及び全国学力・学習状況調査の結果から、主語・述語といった文の構成や、段落相互の関係などの文章構成に関する理解には依然として課題が見られた。単に文章の魅力を伝えるだけでなく、「何を学ぶか」を明確にし、国語の用語を適切に用いながら論理的に読解していく「国語的な見方・考え方」をより確実に働かせられるような指導方法の工夫の必要性を感じた。

4 今後の展開

今後は、習得した「知識・技能」を、実際の読解や思考の場面で有効に機能する「駆動する知識」へと高める授業実践を深めていく。そのためには、児童が知識を使うことのよさを実感できる活動の精選と、授業内容のさらなる工夫が必要である。また、学校としての「学びの系統性」を重視し、各学年での学び方を具体化し、発達に依じての学び方や課題解決能力を積み上げることができるよう、校内での知見を統一していきたい。